一宮町社会福祉協議会長賞

沖縄県／47歳／女性／主婦

菊池（きくち）　いづみ　様

✉手紙の相手：娘

文字を覚えたての幼稚園生だったあなたは、まるでヘレン・ケラーが「ウォーター」の一言で覚醒したように、目を輝かせながら世界を眺めるようになりました。一緒に散歩へ出かければ、道に止まっている車のナンバープレートを指で丁寧になぞり、「へ１２０６」と読み上げては、ご満悦そうにしていました。

そのうち、見様見真似で文字を書き、心のうちを「手紙」に託すことを覚えました。表現の手段を新たに獲得したあなたは、興奮冷めやらぬ様子で、折り紙、チラシの裏紙、メモの切れ端などを、どこからともなく引っ張り出してきては、毎日欠かさずメッセージを書いて、お母さんにプレゼントしてくれたのです。驚くことに、それが丸一年、三百六十五日続きました。

「おかあさん、だいすきだよ」

「いつもおせわしてくれてありがとう」

「いつまでもあいしているよ」

手紙の内容はいずれも、まるで恋文のようだと思いました。しかも嘘偽りのない、ありのままの感情を、飾らずに100％込めた、ピュアな愛で満ちた言葉の数々でした。初めての育児で自信喪失な毎日でしたが、あなたがくれた手紙を読むことで何度も救われました。

「母性」という言葉は、主に女性が自分の産んだ子を守り、育てようとする感情を指します。けれど母さんは、むしろ幼い子どもが母親に対して抱く「無償の愛」こそ、本来の意味での「母性」に近いのではないかと感じるようになりました。あくまで母さんの場合ですが、出産を機に母性が芽生えたのではなく、あなたから三百六十五日手紙をもらい続けた結果、「わたしは愛されている存在だ」と強く気付くことができました。

「世界一大好きだよ」

「いつまでも、愛しているよ」

幼きあなたが、毎日届けてくれたメッセージを、今度は大人の階段を上るあなたに送り届けたいです。

≪手紙への想い≫

目には見えない日頃の感謝や愛情を、手紙という目に見える形で伝え、残したい…と思いながら、気持ちを込めてつづりました。